

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：37703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25381057

研究課題名(和文) 植民地朝鮮における総力戦と教育 朝鮮人児童の「皇国臣民の錬成」を巡る構造

研究課題名(英文) Total warfare and education in colonial korea-structure around training kokokushinmin of korean children

研究代表者

有松 しづよ (ARIMATSU, shizuyo)

志學館大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：70623437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本が朝鮮統治における喫緊課題とし、推進した朝鮮人の女性や貧困層の不就学児童に対する「皇国臣民の錬成」の目的と内容の一端を明らかにした。女性については近い将来に母となる高等女学校生徒に対する「修練」に、児童については保護観察所の外郭団体「大和塾」における「国語講習会」に注目して考察した。高等女学校では新設された家政科に求められていた家政全般の習得に、実践による日本的趣や日本の生活、「国語」習得を併せた「修練」が「軍国の母」育成を目的に行われていた。不就学児童に対する「国語講習会」では「国語」習得に勤労や軍事援護、地域奉仕等の実践を加えた「錬成」が不良化防止と徴兵への情操を目的に実施されていた。

研究成果の概要(英文)：I revealed part of the purpose and contents training KOKOKUSHINMIN that Japan promoted as an important issue on colonial Korea for Korean women and Poor preschool children. Training for Korean women become a mother in the near future at secondary institution had a purpose to make GUNKOKU NO HANA. Therefore Home economics and child care, learning of Japanese hobbies and Japanese life, Japanese by practice and so on were done there. Training KOKUGOKOUSYUUKAI at YAMATOJUKU was an outsider organization of probation office for Poor pre-school children had a purpose to prevent defective and emote to become a soldier. For that reason, Japanese and labor, military aid, community service by practice and so on were done.

研究分野：植民地教育史

キーワード：植民地朝鮮 錬成 大和塾 朝鮮人不就学年齢児童 国語講習会 修練 朝鮮人高等女学校生徒 軍国の母

1. 研究開始当初の背景

1942年5月、朝鮮にも徴兵制を布くことが決定すると、総督府は、全朝鮮人の「真に完全なる皇国臣民」化を喫緊課題とし、完遂へと邁進した。兵士適齢者の朝鮮人青年の「皇民化の度合」を天皇のために笑って死ぬるまでに高める必要に迫られたからである(南次郎「時局に対する半島婦人の覚悟」『文教の朝鮮』1937年9月)。同時に、「徴兵の本質に應える為、半島国民の真の皇国臣民化」も成し遂げなければならなかったからである(総督府学務局島田編輯課長他「徴兵制度実施を控えて」『文教の朝鮮』1942年7月号)。それ故に朝鮮内に住む、「国民教育不浸透分野」の兵士適齢者の朝鮮青年を喫緊対象とし、「青年特別錬成所」(1942年10月1日制令第三十三号として公布、同年11月3日施行)を中心に、「錬成」を開始した(宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1985年)。以後、全国に労働者・農民・女性・官吏などを対象とした「錬成」機関が続々と作られ、戦況が悪化していくに従って「錬成」は全一的に広がるとともに部門別に深化していった。その過程で朝鮮人は「総力戦に適合した人間型として生まれ変わる体験」をし、解放後「錬成」という言葉は死語となったが、その影が現在までも韓国・北朝鮮に濃厚に残っているとされる(鄭在貞「日帝下朝鮮における国家総力戦体制と朝鮮人の生活-『皇国臣民の錬成』を中心に」(『日韓歴史共同研究会第1期(2002-2005年)第3分科報告書』第2部「日本の植民地支配第7章戦時体制下の総動員」、2006年)。それほどまでに朝鮮人を翻弄し、総督府にとっては、朝鮮人を「即急に飛躍的に」、「真に完全なる皇国臣民」へと成し遂げるための「激烈な薬効」(前掲宮田)であった「錬成」とは、いったいどのようなものだったのか。本研究はこのような問題意識に端を発している。

2. 研究の目的

1938年前後に登場した「錬成」は1941年の国民学校制度の施行に際して「最高の教育目標」になり、翌年5月以降は、全朝鮮人を総力戦に適合した「人間型に改造する至上の政策目標」となった。この期の教育動向については、史料となるものの散逸が激しく、十分な研究がなされて来なかった(佐野通夫『日本植民地教育の展開と民衆の対応』社会評論社、2006年)が、「錬成」の内容や展開の方法、朝鮮人の対応様相等の大枠が鄭在貞の研究を介して概観できるようになった。これを踏まえた上で本研究は、国民学校における教育動向に限定して概略が示されたにすぎなかった朝鮮人児童に係る「錬成」について、義務教育制度が導入されていなかったことから朝鮮人児童の半数が国民学校教育の外にいたことを鑑み、不就学児童をも対象に

含め、「錬成」を分析概念として構造的に把握することを目的とする。総督府が志願兵制度の導入、徴兵制施行と展開して行くにおいて近い将来兵士となる朝鮮人児童を対する教育動向(1946年から義務教育制度導入予定)は、この期の教育を知ろうとする上で、象徴的なものである(「内地」については寺崎昌男編前掲)。これまで、総力戦下の植民地朝鮮における「皇国臣民」化について、国民学校の児童及び教員、児童の母親の「皇国臣民」政策の実態解明を個別事案として考察・分析を重ねてきた。それでは個々の事案が朝鮮人に対する「皇国臣民」化政策の事象について明らかになったものの、其々がどのように有機的に関連しあっていたのかについては把握が難しい状況にあった。そこで個々の事案について「錬成」を共通分析概念として改めて掘り下げた考察・分析を行い、其々がどのようなところで有機的に作用し合っていたのかを明らかにした上で、総力戦下の朝鮮人児童を対象とした教育動向、「皇国臣民の錬成」を構造に把握するまでに発展させたいというのが当初の研究目的であった。しかしながら病気(眼病)のため研究遅滞が発生し、本研究期間では大和塾における貧困層の朝鮮人不就学学齢児童を対象とした「錬成」および近い将来に母となる朝鮮人高等女学校生徒を対象とした「修練」について考察するに留まった。

(1) 学校教育の外側にいた貧困層の不就学学齢児童の「錬成」を担っていた大和塾については塾の性格及び大和塾が実施していた教育活動のうち、「国語」教育を「錬成」を分析概念として明らかにする。その際、不就学学齢児童に対する「国語」教育における講師の性格と講師に対する「錬成」についても考察する。教師は家族とともに大和塾に収容された、「教化善導」を必要とする日本の朝鮮統治に対する反体制思想を持った朝鮮人で保護観察対象となっていた。大和塾による不就学学齢児童に対する「錬成」が総力戦期における朝鮮統治上の課題、朝鮮人の「真に完全なる皇国臣民」化との連関がみえてくる。(2) また近い将来において母となる朝鮮人高等女学校生徒を対象とした「修練」と総力戦体制末期の日本による朝鮮女性に対する教育方針の転換、それまで単に日本女性かつ皇国女性としての「錬成」教育から「軍国の母」となる教育へとシフトとの関係を考察する。朝鮮にも徴兵制度を布いた日本が改めてこれまでの教育では朝鮮人が日本人に、皇国臣民になりきれていない現実を見せつけられたことが次世代朝鮮人女性の教育に反映していたことをみることが出来る。

3. 研究の方法

(1) 大和塾が「国語講習会」の対象としていた貧困層の朝鮮人不就学学齢児童の「錬成」及び「国語講習会」の教師に対する「錬成」

の内容と目的がどこに置かれていたのかを明らかにしたうえで、それが総力戦期における日本の朝鮮統治上の喫緊課題であった朝鮮人の「真に完全なる皇国臣民」化とどのような連関関係にあったのか以下の史料を用いて解明する。総力戦期に朝鮮で発行されていた雑誌『朝鮮』『文教の朝鮮』『新時代』『緑旗』『朝鮮司法保護』等。帝国日本の域で発行されていた雑誌『日本語』『国語運動』等。朝鮮の緑旗連盟が発行した『大和塾日記』等。「錬成」の分析概念については寺崎昌男編『総力戦体制と教育-皇国民「錬成」の理念と実践』における視点をを用いた。

(2) 近い将来において母となる朝鮮人高等女学校生徒を対象とした「修練」内容を明らかにしていく。そのうえで総力戦体制末期の日本による朝鮮女性に対する教育方針の転換、それまで単に日本女性かつ皇国女性としての「錬成」教育から「軍国の母」となる教育へとシフトが高等女学校における「修練」とどのように関係していたのか、またどのような「軍国の母」像が描かれ、「修練」の結果の目標としておかれていたかを明らかにする。考察分析にあたっては以下の史料や参考図書を用いた。総力戦期に朝鮮で発行されていた雑誌『朝鮮』『文教の朝鮮』『緑旗』『国民総力』『新女性』等、朝鮮で発行されていた新聞『京城日報』。帝国日本の域で発行されていた雑誌『日本語』『国語文化』等。宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(未来社、1985年)、羅英均『日帝時代わが家は』(みすず書房、2003年)。「錬成」の分析概念については寺崎昌男編『総力戦体制と教育-皇国民「錬成」の理念と実践』における視点をを用いた。

4. 研究成果

(1) 貧困層の朝鮮人不就学学齢児童に対する「錬成」は午前の「国語講習会」と午後の有休による授産事業における勤労、加えて休日の軍事援護実践や地域奉仕を通して進められていた。「国語講習会」では朝鮮人兵士に必要とされていた国民学校4年生程度の日本語習得を目標としていた。これにボール箱製造等の有休勤労、休日の国防献金活動といった軍事援護実践、市内の清掃活動を組み合わせた「錬成」が行われていた。勤労実践に重きをおき、貧困層の不就学学齢児童の不良化防止と男子に限っては近い将来において帝国日本の兵士となる次世代朝鮮人の「真に完全なる皇国臣民」化が図られていた。彼らに対する「錬成」を寺崎らが用いた型で言うならば学校教員に対する「道場型」ではなく通学スタイルを採用し家庭や地域とつながりを持ちつつの「生活型」が用いられていた。いっぽうで「国語講習会」の講師としての役割を担っていた保護観察対象者の「錬成」は朝夕の儀式励行、午前の「国語講習会」にお

ける教育活動、午後の授産事業における勤労、夜の社会人を対象とした「国語講習会」における講師としての教育活動を通して「錬成」が実施されていた。四六時中あれこれ考える隙間を全く与えない「体得実践」に絞られた「錬成」であった。保護観察対象者の反体制思想を「破碎撃滅」し、彼らを同胞であり貧困層の不就学学齢児童の「錬成」に取り組みさせることによって、民族思想や共産思想による反体制思想を取り除こうとしていた。貧困層の不就学学齢児童に「国語」習得させ、職業的スキルを習得させるという貧困層に貧困からの離脱方法を提供する方式を顕現かつ自らに実行させることがとりわけ「赤化」された保護観察対象者の思想転換に効果があると考えられていた。家族とともに24時間まるごと保護司の監視下におかれた昼夜を問わない「錬成」は特異な「道場型」のなかで展開された「生活型」であったと言える。

(2) 近い将来に母となる高等女学校生徒に対する「修練」は1943年の中等学校令中改正による新設科目家政科に「修練」の特徴をみることができる。総力戦期に日本が朝鮮人女性に求めた家政、育児、保健、被服にかかる教養を習得させ、かつ「日本的趣味」や「日本の生活の建設」を進める、「国語常会」による日本語の精練による「修練」が進められていた。「日本的趣味」には茶道、華道、和歌の朗詠、割烹、裁縫、日本庭園のデザイン、能や狂言等の実践が行われていた。「日本の生活の建設」と「国語常会」については日本人と朝鮮人が学ぶ京城公立舞鶴高等女学校に注目して考察した。「日本の生活の建設」は日本人と朝鮮人からなるひと組の学友が土曜日放課後から月曜日朝まで校長宅で過ごして日本式生活を体験するというものであった。また「国語常会」は正しい日本語を使用することによって正しい心を作ろうというスローガンのもと、毎月1回全校生徒を講堂に集めて開催されていた。ちなみに「皇国臣民の誓詞」や「国語常用の誓詞」は1日に2回大声でそらんじていた。こうした「修練」によって高等女学校を卒業して母となったその日から総力戦体制の日本が朝鮮人女性に求めていた「軍国の母」となることが目指されていた。「国体」を理屈なしに自覚したうえで子どもに「国体」というものがどのようなものであるかを理解させるための情操養育を日々実行する。そうして総力戦体制に適合した「お国の為に役立つ」子どもを育て、彼らを喜んで戦場に送り出し、自らも国家のためにすべてを捧げることが「軍国の母」としての姿であった。その折に「修練」を通して習得した「日本的趣味」や「日本の生活の建設」、「正しい国語の常用」を日々実践するという姿が朝鮮女性に求められていた。こうした「軍国の母」としてのあり方が「国家の中堅たるべき有為の人物」となるこ

とを期待されていた朝鮮人高等女学校生徒に示されていたのであり、中等教育機関を卒業した朝鮮女性に求められた女性としての有るべき姿であった。

(3)以上(1)(2)の考察を通して総力戦末期の日本が朝鮮で展開した「錬成」や「修練」が日本の朝鮮統治における喫緊課題に因應べく実施されていたことがみえてくる。当研究が注目した大和塾における「錬成」もそのひとつであったことがわかる。反体制勢力としての朝鮮人民族主義者や共産主義者の保護観察対象者を「思想善導」し、「真に完全なる皇国臣民」へと転向させることであった。社会主義国と地理的にも接近していた朝鮮において徴兵制度を円滑に展開していくには解決を迫られる課題であった。また学校教育による「錬成」から洩れていた朝鮮人貧困層の不就学学齢児童が貧困ゆえに「赤化」することから隔離する必要があった。こうした「思想善導」を進めていた日本が徴兵制度を布いてみると、朝鮮人母親が「皇国臣民」からほど遠い存在であることが露顕する。彼女たちが徴兵制度を展開しようとする日本の前に見えない壁となつて立ちはだかっていた。朝鮮人高等女学校生徒に対する「修練」はこうした朝鮮人母親の「無知」の解消を目指すものであった。

(4)本研究が目指す日本が朝鮮で推進した個々の朝鮮人を対象にした「錬成」や「修練」がどのように関連しあい、機能していたのかについてはつぎのようなことが言える。個々に施された「錬成」や「修練」を通して朝鮮人は朝鮮における総力戦体制に適應した「皇国臣民」に「善導」され、その上でそれぞれがおかれた立場において朝鮮人次世代の「錬成」を担う「善導」指導者としての役割をはたすべく教養を実践と併せて習得し(させられ)ていた。そうやって次世代の「錬成」を担うことによってそれぞれが持つ教養や思想的な要求に一定の範囲で因應する構図がつくられていた。さらに鳥瞰的視点でみると次のことが言える。朝鮮で展開されたそれぞれの「錬成」や「修練」は対象者その者の「真に完全なる皇国臣民」化を図る者であったと各「錬成」や「修練」が相互作用することによっていっそう「皇国臣民」としての深化させる機能を孕んでいた。その結果として総力戦期の日本が抱えた朝鮮統治上の喫緊課題に因應することができる構造が想定されていた。

(5)その他、師範学校生徒に対する「修練」と京畿道に限ってのことではあるものの「浮浪児」に対する「錬成」について考察を進めるための史料を一定の範囲で収集できている。師範学校生徒に対する「修練」の実態を史料だけでなく、鹿児島県在住で朝鮮内にあった師範学校卒業生に対する聞き取り調査

からも得ようと準備を進めてきている。病気で取り掛かりが遅れているが、今後継続調査し、機会を得て発表していきたい。また「浮浪児」を対象にした「錬成」についても京城にあった香隣園の活動に注目して考察を進めている。ともに貧困層の朝鮮人不就学学齢児童を対象にする大和塾と香隣園における「錬成」について考察することによって国民学校における「錬成」と併せて朝鮮の学齢児童に対する「錬成」を把握することができるとおもう。香隣園に暮らす朝鮮人児童は「浮浪児」として都市の防犯とともに美観の一環からも当時の京畿道が一扫を図る喫緊課題であり、朝鮮統治という観点においても朝鮮人「浮浪児」が生命を維持するために触法または「赤化」することから隔離しなければならなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

有松しづよ、日本統治下朝鮮における朝鮮人高等女学校生徒の「皇国臣民」化、植民地教育史年報、2014年、26-49、査読あり。

有松しづよ、植民地朝鮮の大和塾における不就学学齢児童の「錬成」-「国語講習会」に注目して-、植民地教育史年報、2016年、132-151、査読あり。

〔学会発表〕(計2件)

有松しづよ、日本統治下朝鮮における朝鮮人高等女学校生徒の「皇国臣民」化、植民地教育史研究会2013年研究大会。

有松しづよ、植民地朝鮮の大和塾における不就学学齢児童の「錬成」-「国語講習会」に注目して-、九州大学基礎学研究会12月定例研究会、2015年12月。

6. 研究組織

(1)研究代表者

有松 しづよ (ARIMATSU shizuyo)
志學館大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：70623437